九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

大学生における職業未決定とアイデンティティとの関連

森本, 文子
九州大学大学院人間環境学府

https://doi.org/10.15017/15728

出版情報：九州大学心理学研究. 9, pp.205-213, 2008-03-31. Faculty of Human-Environment Studies, Kyushu University
バージョン：
権利関係：

Kyushu University Psychological Research
2008, Vol.9, 205-213

大学生における職業未決定とアイデンティティとの関連[1)]

森本　文子　九州大学大学院人間環境学府

The relation between vocational indecision and identity of college students

Fumiko Morimoto (*Graduate school of human-environment studies, Kyushu university*)

The purpose of this study was (1) to examine the relationship between vocational indecision and identity formation, and the way of the mutual influence of them in university students, and (2) to weigh the difference of vocational indecision and identity formation in two groups which were distributed into whether students choose teacher-training course. A questionnaire was administered to 374 university students. It contained (a) a questionnaire about vocational indecision which referred to Vocational Indecision Scale (Simoyama, 1986) and added items to, and (b) Multidimensional Ego Identity Scale (Tani, 2001). Result showed that (1) the relations between vocational indecision and identity formation was examined, moratorium and uneasiness about vocational decision affected identity formation, and indefiniteness of self-consciousness affected vocational indecision. In addition, (2) as for teacher-training course selectors, self-consciousness was clearer than not-selectors, and as for not-selectors, moratorium and uneasiness was higher than selectors. Furthermore, it was suggested that there were students who did not become one of vocational choices teaching profession, and did not reduce difficulty of vocational decision in students of teacher-training course.

Keywords: university students, vocational indecision, identity

I　問題と目的

大学の学生相談所あるいは保健管理センターには，職業未決定を主訴として来談する学生が多い（下山，1985）。近年，企業の求人全体が減少し，新規学卒者の正社員としての雇用状況は厳しくなってきている（神村，2004）。その一方で，多様な生き方や選択肢が認められるようになってきたともいえる。大学生にフリーターへの肯定的見解を持つフリーター志向が強まってきているとの指摘（安達・太田，2004）からも，正社員以外の選択肢も近年ではそれほど問題視されない傾向がある。このような背景から生じる，フリーターやニート（無業者）の急増の問題（若松，2004）や，雇用形態が契約社員や派遣社員などの正社員以外へと多様化しているという事態は，大学生の職業未決定の問題を助長しているとも考えられる。笠原（1976）の，時代とともに青年期が長期化しているという指摘にもあるように，近年の急速な産業化や社会構造の変化によって青年期が延びてきているとすれば，職業決定の時期が延長される傾向は否定できないであろう。このように，さまざまな要因から大学生の職業未決定の問題は今後も深刻であることが予想され，対策が急務な課題といえる。

Erikson, E, H (1959) によれば，アイデンティティの形成が青年期の重要な発達課題とされる。青年期である大学生のアイデンティティの形成においては，職業的な要因が重要な意味をもつことが示唆されている（下山，1986；高村，1997；杉村，2001）。石谷（1999）は，学生相談室での4年間・598事例を面接回数によって分類し，回数によって特徴に違いがあることを示している。その分類とは，初期相談，短期相談，中期相談，長期相談の4つである。そのうち短期相談では，進路選択，就職活動などを機に一過性の心理的危機に陥った学生に対し，学生生活上の実際的問題を解決するのを支援しているが，内面的な問題に取り組む学生はほとんどおらず，カウンセラーは気がかりだという感想が多いとされる。中期相談では，学生生活にまつわる問題から来談し，やがて内面探索に取り組む者と，不安や不満を語り，カウンセラーの共感的理解に支えられて日常を乗り切る者とが混在している可能性を示唆している。浦上（1996）が，就職活動という自分を見つめる機会が自己成長力を高めうると述べているように，職業決定や就職活動などにまつわる問題が，自己の内面を見つめなおし，アイデンティティを形成していく過程に影響を与えることが想定される。しかしながら，職業決定とアイデンティティ形成と

[1)] 本論文は，平成16・17年度科学研究費補助金研究成果報告書萌芽研究，若年者の就業に向かう自信の構造と効果的支援に関する学際的研究（課題番号16653051）に提出した論文を一部加筆・修正したものである。

の関連性は指摘されているものの，どのように関連し影響するのかを詳細に明らかにしている研究はあまり見当たらない。

一見適応的で，職業決定に近いように見える学生の中にも，アイデンティティの形成に困難を抱える者がいることが考えられる。杉原（1998）は，Marcia（1966）のアイデンティティ・ステイタスの4タイプのうち，早期完了型（foreclosure）に着目している。そして，表面的には適応的であり，揺れや迷い，不安などを表明しない早期完了型の学生も，投影法や面接によってきめ細かく調べてゆくと内的にはまとまりのつかない不安や混乱を抱えている兆候が認められる場合があることを示唆している。さらに杉原（2001）は，学生相談に来談した過剰に適応的で早期完了型的な特徴を持つ男子大学生が，面接の経過において恐怖症の症状が緩和し，それと並行して次第にモラトリアム的特徴へ変化していった事例を報告しており，アイデンティティ・ステイタスの諸特徴の変化から，青年期のアイデンティティ発達過程の理解や臨床的介入のあり方を検討している。このように，一見すると適応的に見えるが，実はアイデンティティ形成など自己の内面に問題を抱えている学生に対しては，目が向きにくいと思われる。そこで，本研究では，このような学生に着目し，一見適応的で職業決定に近いと思われる学生群として教職課程の学生を取り上げる。教職課程を選択しているということは，就職活動前，大学生活の比較的早期に職業をある程度方向付けているという指標の一つとなりうると考える。

わが国では，受験が終了する大学入学後にようやく職業への自由な役割実験が開始される（下山，1992）。そのため，大学生の職業未決定は大学入学前や入学後早期に将来就きたい職業について考えてこなかったことや，考えることができなかったことにも由来することが考えられる。早期の職業の想定が職業決定に及ぼす影響について検討している研究には，教員養成系の学部を対象とした若松（2001, 2005）の一連の研究などがある。若松（2001）は，教員養成学部を対象として進路決定者群と未決定者群とに分け，決定者群に，進路の選択肢として教職を挙げている人の割合が有意に多かったことを明らかにしている。さらに若松（2005）は，同じく教員養成学部を対象として，進路未決定者の困難さについて教職志望の有無による差異を検討し，教職を想定している場合，職業の選択肢が一つはあるということによって，困難さの感覚が低くなることを指摘している。これらの研究は，教職という職業の想定があるということによる全般的な職業決定傾向を示唆しているが，表面下にある教職志望者の内面の様相については明らかにしていない。

以上により，本研究では大学生を対象とし，職業未決定と自己の内面の成熟度をあらわすアイデンティティ形成との関連，相互の影響の仕方について検討することを第一の目的とする。次に，教職課程選択の有無によって群分けし，職業未決定やアイデンティティ形成の違いを検討することを本研究の第二の目的とする。

II　予備研究：職業未決定に関する質問紙の作成

1．目　的

本調査で用いる質問紙を作成することを目的とする。職業未決定尺度（下山，1986）は，作成されたのが約20年前である。そのため，現在の日本の職業決定状況には合致しない項目がある可能性や，学生の職業決定に対する考え方や行動が変化してきた可能性が考えられる。そこで，他の研究を参考にしたり，自由記述による予備調査を行って新たな項目を追加し，現在の社会に合った質問紙を作成する。

2．方　法

調査対象者　A県内の私立B大学の大学生374名。平均年齢は19.47歳（*SD*＝1.41）。

調査時期および手続き　2005年10月に授業時間中に一斉に実施した。3件法で回答を求め，“あてはまる”を3点，“どちらともいえない”を2点，“あてはまらない”を1点として得点化した。

質問紙　質問紙は以下のもので構成され，合計41項目である。①職業未決定に関する34項目：職業未決定尺度（下山，1986）：日本の大学生を対象として作成されており，6つの下位尺度から構成される。職業未決定の状態を「未熟」「混乱」「猶予」「模索」「安直」の5つの次元から測定した上で，さらに職業の決定・未決定を下位尺度の「決定」で把握できる。本研究では職業の決定・未決定の測定を中心としない。そのため，下位尺度の「決定」は除いて用いた。

②職業決定に関する1項目：山下・河野ら（2003）を参考に，山下・河野ら（2003）が職業未決定尺度（下山，1986）の下位尺度「決定」を除いて追加した「卒業後，どのような職業（職種）に就きたいかを既に決めている」という項目を用いた。

③予備調査による追加6項目：A県内の私立B大学の大学生男女20名（平均年齢＝20.20歳，*SD*＝1.32）に「職業を決めるためにあなたがやろうと思っていること（やったこと），あるいはやった方がよいと思うことを，以下の空欄に具体的にお書き下さい」という内容の自由記述の質問紙を2005年10月に配布し回収した。得られた内容は，心理学を専攻とする大学院生3名によってKJ法的手法を用いてカテゴリー分類され，6項目を作成して加えた。

3．結　果

職業未決定に関する質問紙41項目の平均値，標準偏差を算出し，因子分析を行った。スクリープロットで第3固有値と第4固有値との間にギャップがみられ，因子の解釈可能性からも3因子構造が妥当であると考えた。そこで，3因子を仮定して因子分析を行った。その結果，因子負荷量が0.35に満たなかった10項目と，複数の因子に対して0.35以上の高い因子負荷量を示した1項目の計

Table 1
職業未決定に関する質問紙の因子分析結果（Promax 回転後のパターン）

NO.	項目内容	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ
14_	自分の知っている職業の中で，やりたいと思う職業がみつからない。	.72	-04	.07
30_	自分が職業としてどのようなことをやりたいのかわからない。	.69	.19	.03
35_	卒業後，どのような職業（職種）に就きたいかを既に決めている。(R)	.67	.02	-.22
26_	将来の職業については，考える意欲が全くわかない。	.66	.03	-.13
05_	将来，やってみたい職業がいくつかあり，それらについていろいろ考えている。(R)	.57	-.07	-.31
02_	せっかく大学に入ったのだから，今は職業のことは考えたくない。	.56	-.18	.00
01_	自分の将来の職業については，何を基準にして考えたらよいのかわからない。	.55	.13	.07
31_	職業のことは，大学4年生になってから考えるつもりだ。	.54	-.11	-.04
38_	就きたい職業に直接つながるような経験をしようと思っている（あるいはした）。(R)	.51	-.05	-.25
36_	将来就きたい職業に必要な資格を取得するつもりである（あるいは取得した）。(R)	.50	-.03	-.25
08_	職業決定と言われても，まだ先のことのようでピンとこない。	.50	.04	.18
25_	今の状態では，自分の一生の仕事などみつかりそうもない。	.47	.29	.06
03_	できることなら職業決定は，先に延ばし続けておきたい。	.46	.00	.03
09_	将来自分が働いている姿が全く思い浮かばない。	.44	.27	-.04
23_	自分にとって職業につくことは，それほど重要なことではない。	.36	-.27	.16
10_	職業決定のことを考えると，とても焦りを感じる。	-.10	.77	-.16
04_	望む職業につけないのではと不安になる。	-.21	.66	-.06
21_	将来の職業のことを考えると気が滅入ってくる。	.09	.66	-.13
18_	誤った職業決定をしてしまうのではないかという不安があり，決定できない。	.12	.50	.17
20_	職業につけたとしても，うまくやっていく自信がない。	.09	.44	.08
27_	私は，あらゆるものになれるような気持ちになる時と，何にもなれないのではないかという気持ちになる時がある。	-.02	.37	.16
19_	私は，いつも自分で実現できないような職業ばかり考えている。	.14	.35	.08
37_	多くの情報を集めて自分に合った職業をみつけていくつもりだ。	-.18	-.09	.67
11_	職業を最終的に決定するのはまだ先のことであり，今はいろいろなことを経験してみる時期だと思う。	.09	-.11	.59
16_	職業に関する情報がまだ充分にないので，情報を集めてから決定したい。	.22	.09	.53
28_	これだと思う職業がみつかるまでじっくり探していくつもりだ。	.10	-.10	.52
40_	とりあえず，幅広く通用しそうな資格を取得しておこうと思う（あるいは取得した）。	-.15	.04	.52
39_	職種にとらわれず，幅広く様々な経験をしたい。	.02	-.05	.42
33_	職業は決まっていないが，今の関心を深めていけば職業につながってくると思う。	-.09	.05	.39
22_	将来の職業については，いくつかの職種に絞られてきたが，最終的にひとつに決められない。	-.23	.24	.39
因子相関行列	Ⅰ	—	.48	.20
	Ⅱ	—	—	.27
	Ⅲ	—	—	—

(R)は得点を逆転化した

Table 2
職業未決定に関する質問紙の相関係数，平均値，*SD*

	モラトリアム	不安	模索	平均	*SD*
モラトリアム	—	.42(**)	.14(**)	24.37	6.18
不安		—	.24(**)	14.22	3.24
模索			—	18.98	3.18

** $p<.001$

11項目を削除し，再度30項目について一般化された最小二乗法・プロマックス回転による因子分析を行った。なお，その際No.35, No.05, No.38, No.36については得点を逆転化して計算をした。その因子パターンをTable 1に示す。

第1因子は15項目で構成されており，やりたい職業がみつからない，卒業後の職業が決まっていない，職業決定を先に延ばしたいなどの職業決定に対するモラトリアム状態を表す項目に負荷量が高いことから，「モラトリアム」因子と命名した。第2因子は7項目から構成され，職業決定に対する焦りや不安状態を表しており，「不安」因子と命名した。第3因子は8項目から構成され，様々な情報を集めたり幅広い経験をした後に職業を決めていきたいという項目に負荷量が高く，「模索」因子と命名した。因子間相関に着目すると，$r=.20$から$r=.48$の相関がみられた。また，3つの下位尺度間の相関を調べたところ，全ての下位尺度間において互いに有意な相関を示した。したがって，各因子および各下位尺度は相互に関連しているといえる。この結果に基づき，下位尺度に含まれる項目平均値を下位尺度得点とし，尺度全体に含まれる項目平均値を尺度全体の合計得点として算出した。新たに作成された職業未決定に関する質問紙の下位尺度の相関および平均値，標準偏差をTable 2に示す。

次に，各下位尺度に相当する項目の内的整合性を検討するために各下位尺度のα係数を算出したところ，「モラトリアム」で$\alpha=.86$，「不安」で$\alpha=.74$，「模索」で$\alpha=.70$，と十分な値が得られた。また，尺度全体については，$\alpha=.85$であり，十分な値であった。このことから，職業未決定に関する質問紙は尺度全体として職業未決定という概念を一貫して測定しており，内的整合性を有することが示された。

4．考　察

因子分析の結果から，大学生の職業未決定は，やりたい職業がみつからず職業決定を先に延ばしたいなどの職業決定に対する猶予を表す「モラトリアム」と，職業決定に対する焦りや不安を表す「不安」，様々な情報を集めたり幅広い経験をしたりした後に職業を決めていこうとする「模索」の3つの下位尺度から捉えられるということが示唆された。また，各因子および各下位尺度が正の相関をもつという結果は，相互に関連し合っている職業未決定の状態の各側面を測定しているということを示すものである。

No.35, No.05, No.38, No.36については得点を逆転化して計算をしている。このうち，No.35は山下・河野ら（2003）が職業未決定尺度（下山，1986）に追加した，職業未決定とは反対に職業決定を尋ねる項目であるため，得点を逆転化した。また，No.38, No.36については，自由記述により作成した項目であり，得点の逆転化を想定して追加した項目である。ところが，職業未決定尺度（下山，1986）から引用したNo.05，「将来，やってみたい職業がいくつかあり，それらについていろいろ考えている」という項目は，職業未決定尺度（下山，1986）において得点の逆転化はされていない。以前では，この項目は将来の職業についていろいろと考えて模索している状態であると捉えられていたのに対し，今日では，将来の職業についていろいろと考えてはいるのだが，職種を絞ったり実際行動したりすることができずに職業決定を猶予している状態と捉えられていることが読み取れる。そのため，得点を逆転化することとした。このように，時代の推移とともに学生の職業決定に対する考え方や行動が変化するため，同一の項目であっても時代の流れに合致した解釈をおこなう必要があるであろう。

III　本調査

1．目　的

大学生を対象とし，職業未決定とアイデンティティの形成の関連，相互の影響の仕方について検討することを第一の目的とする。次に，教職課程選択の有無による職業未決定やアイデンティティ形成のちがいを検討することを本研究の第二の目的とする。

2．方　法

調査対象者　A県内の私立B大学の大学生374名。平均年齢は19.47歳（$SD=1.41$）。教職課程選択者は計176名で，平均年齢は19.29歳（$SD=1.37$）であり，教職課程非選択者は計198名で，平均年齢は19.63歳（$SD=1.42$）

であった。

質問紙　①職業未決定に関する質問紙：職業未決定について測定するために，予備研究で作成したものを用いた。「モラトリアム」，「不安」，「模索」の３つの下位尺度，計30項目。

②多次元自我同一性尺度（Multidimensional Ego Identity Scale ; MEIS，以下 MEIS と略す）：アイデンティティの形成について測定するために，谷（2001）が作成した尺度20項目を用いる。この尺度は，従来のアイデンティティ尺度における信頼性や妥当性に関する問題を指摘した上で詳細な検討をしており，Erikson，E.H の理論に基づく青年期の記述との対応を意識した上で，青年期固有のアイデンティティの感覚の構造を「自己の斉一性・連続性」，「対他的同一性」，「対自的同一性」，「心理社会的同一性」の４つの下位尺度から測定するため，多次元で捉えることが可能である。

調査時期および手続き　2005年10月に授業時間中に一斉に実施した。所要時間は15分程度であった。職業未決定に関する質問紙と MEIS とは同一の用紙に印刷され，同一の時間内に回答を得た。前者は３件法で回答を求め，“あてはまる”を３点，“どちらともいえない”を２点，“あてはまらない”を１点として得点化した。後者は７件法で回答を求め，“非常にあてはまる”を７点，“かなりあてはまる”を６点，“どちらかというとあてはまる”を５点，“どちらともいえない”を４点，“どちらかというとあてはまらない”を３点，“ほとんどあてはまらない”を２点，“全くあてはまらない”を１点として得点化した。なお，MEIS は20項目中14項目が逆転項目であるため方向を逆転して得点化し，各下位尺度に含まれる項目得点の合計値を下位尺度得点，尺度全体に含まれる項目得点の合計値を尺度全体の合計得点として算出した。

３．結　果

(1) 職業未決定とアイデンティティの形成の関連，相互の影響の仕方

①職業未決定とアイデンティティとの関連：職業未決定に関する質問紙と MEIS の下位尺度の関連性を検討するために，相関を調べた。その相関係数を Table 3 に示す。全体尺度間での相関は $r=-.50$ と中程度の有意な相関があった。これは，職業未決定とアイデンティティの形成が関連しているということを示唆するものである。さらに，下位尺度の「対自的同一性」に対しては「不安」で $r=-.40$，「モラトリアム」で $r=-.65$ であり，「不安」に対しては弱程度の有意な相関であったのに対し，「モラトリアム」に対しては中程度の有意な相関が見られた。

②職業未決定がアイデンティティの形成に及ぼす影響について：職業未決定がアイデンティティの形成に及ぼす影響について検討するため，「モラトリアム」「不安」「模索」を独立変数，MEIS を従属変数として重回帰分析を行った。その結果を Table 4 に示す。「モラトリアム」と「不安」から MEIS に対する標準回帰係数が有意であったが，「模索」から MEIS に対する標準回帰係数は有意ではなかった。

③アイデンティティの形成が職業未決定に及ぼす影響について：アイデンティティの形成と職業未決定は相互に影響し，ともに変化していくものであることが予想される。そのため，アイデンティティの形成が職業未決定に及ぼす影響についても検討する必要があると思われる。そこで，「自己の斉一性・連続性」「対他的同一性」「対

Table 3
職業未決定に関する質問紙と MEIS の相関

	モラトリアム	不安	模索	職業未決定質問紙	自己の斉一性・連続性	対自的同一性	対他的同一性	心理社会的同一性	MEIS
モラトリアム	—	.42 ***	.14 **	.86 ***	−.19 ***	−.65 ***	−.19 ***	−.35 ***	−.44 ***
不安		—	.23 ***	.71 ***	−.38 ***	−.40 ***	−.34 ***	−.47 ***	−.51 ***
模索			—	.52 ***	.00	−.15 **	.02	−.04	−.04
職業未決定質問紙				—	−.26 ***	−.63 ***	−.24 ***	−.41 ***	−.50 ***
自己の斉一性・連続性					—	.31 ***	.53 ***	.54 ***	.79 ***
対自的同一性						—	.33 ***	.52 ***	.71 ***
対他的同一性							—	.49 ***	.76 ***
心理社会的同一性								—	.81 ***
MEIS									—

*** $p<.001$，** $p<.01$

Table 4
職業未決定に関する質問紙の下位尺度を独立変数，MEIS を従属変数とした重回帰分析結果

	MEIS
	β
モラトリアム	−.28 **
不安	−.42 **
模索	.09
R^2乗値	.34 **

** $p<.001$
β：標準偏回帰係数

Table 5
MEIS の下位尺度を独立変数，職業未決定に関する質問紙を従属変数とした重回帰分析結果

	職業未決定
	β
自己の斉一性・連続性	−.05
対自的同一性	−.58 **
対他的同一性	.06
心理社会的同一性	−.07
R^2乗値	.40 **

** $p<.001$
β：標準偏回帰係数

Table 6
教職課程選択者と教職課程非選択者との差の検討

	教職課程選択者		教職課程非選択者		t 値
	平均	*SD*	平均	*SD*	
モラトリアム	1.52	.40	1.71	.40	4.52 **
不安	1.98	.48	2.08	.45	2.05 *
模索	2.38	.42	2.37	.38	−.21
斉一性・連続性	23.02	7.41	23.02	7.01	.00
対自的同一性	22.12	6.78	19.34	6.44	−4.04 **
対他的同一性	18.81	6.61	19.73	5.50	1.46
心理社会的同一性	21.11	5.99	20.01	4.81	−1.83

** $p<.001$, * $p<.05$

自的同一性」「心理社会的同一性」を独立変数，職業未決定を従属変数として，重回帰分析を行った。その結果，「対自的同一性」から職業未決定に対する標準回帰係数が有意であったが，その他の下位尺度から職業未決定に対する標準回帰係数は有意ではなかった（Table 5）。

(2) 教職課程選択の有無による職業未決定やアイデンティティ形成の違い

①教職課程選択の有無別に職業未決定に関する質問紙と MEIS の各下位尺度得点について t 検定を行った。その結果，「モラトリアム」下位尺度（$t(366)=4.52$，$t<.001$）と「不安」下位尺度（$t(371)=2.05$，$t<.05$）について，教職課程選択者よりも教職課程非選択者のほうが有意に高い得点を示し，「対自的同一性」下位尺度（$t(367)=-4.04$，$t<.001$）については，教職課程非選択者よりも教職課程選択者のほうが有意に高い得点を示した。「模索」，「自己の斉一性・連続性」，「対他的同一性」，「心理社会的同一性」下位尺度については両群の得点差は有意ではなかった（Table 6）。

②教職課程選択の有無による2群の差をさらに詳細に検討するため，MEIS の得点によって，上位30％を高群，中間40％を中群，下位30％を低群の3群に分けてアイデンティティタイプとし，教職課程の選択の有無とアイデンティティタイプを独立変数，職業未決定に関する質問紙の下位尺度「モラトリアム」「不安」「模索」を従属変数とした2要因の分散分析を行った。その結果を Table 7に示す。分散分析の結果，「モラトリアム」（$F(2,351)=4.92$，$t<.01$）について有意な交互作用が見られた。交互作用が有意であったことから，単純主効果の検定を行った。その結果，「モラトリアム」について教職課程選択者群と教職課程非選択者群の両群におけるアイデンティティタイプの単純主効果（それぞれ $F(2,351)=18.03$，$t<.001$；$F(2,351)=23.53$，$t<.001$），アイデンティティ中群における教職課程選択の有無の単純主効果（$F(1,351)=22.19$，$t<.001$）が有意であった。

さらに，教職課程選択者群と教職課程非選択者群の両群におけるアイデンティティタイプの単純主効果が有意であったことから Tukey の HDS 法（5％水準）による多重比較を行ったところ，「モラトリアム」についてア

Table 7
教職課程選択の有無とアイデンティティタイプによる職業未決定に関する質問紙の下位尺度得点の分散分析結果

教職 アイデンティティ	教職課程選択			教職課程非選択			主効果		交互作用
	高	中	低	高	中	低	教職課程選択	MEIS	
モラトリアム	20.44 (4.76)	22.70 (4.93)	26.65 (6.78)	21.06 (4.93)	27.11 (5.16)	27.36 (6.13)	10.69**	37.34***	4.92**
不安	12.10 (3.10)	14.40 (2.79)	16.00 (2.76)	12.08 (3.05)	15.10 (2.69)	15.79 (2.64)	0.85	51.15***	1.84
模索	18.52 (3.79)	19.38 (3.12)	19.47 (2.75)	18.56 (3.55)	19.33 (2.77)	18.58 (2.98)	0.79	2.05	0.74

上段：平均値，下段：標準偏差
***p<.001，**p<.01

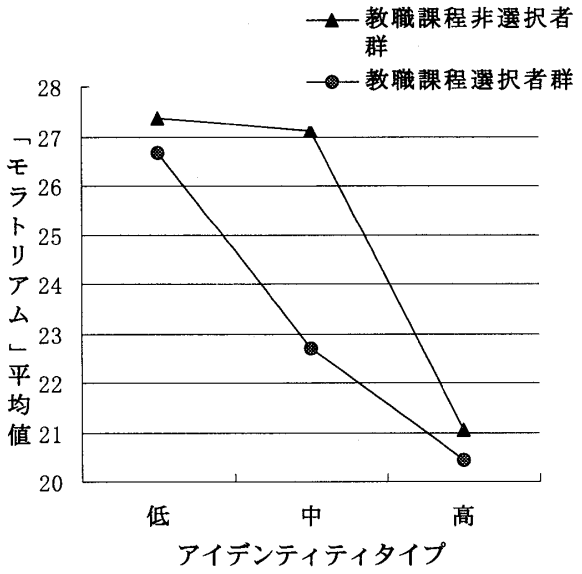

Fig.1　教職課程選択の有無とアイデンティティタイプ別の「モラトリアム」平均値

イデンティティ低群<中群<高群という結果が得られ，全てのアイデンティティタイプの高・中・低群の間に有意な差がみられた（Fig.1）。

4．考　察

(1) 職業未決定とアイデンティティとの関連，相互の影響の仕方について

①職業未決定に関する質問紙と MEIS の全体尺度間に，$r=-.50$と中程度の有意な相関があった。このことは，職業決定が青年期のアイデンティティ形成に関連するという研究（下山，1986；高村，1997；杉村，2001）と同様に，職業未決定とアイデンティティとが関連していることを支持した。下位尺度間では，「対自的同一性」と「不安」に$r=-.40$と低度の負の相関が，「対自的同一性」と「モラトリアム」に$r=-.66$と中程度の相関が見られた。このことは，自己意識が不明確であるという自分の無さは，職業決定に対する焦りや不安と，やりたい職業がみつからず職業決定を先に延ばすモラトリアムと関連していることを示している。

②職業未決定がアイデンティティの形成に及ぼす影響について検討した結果から，職業決定を延期するモラトリアム状態と職業決定に関する不安がアイデンティティの形成に影響を与えていることが示唆された。浦上（1996）が，就職活動という自分を見つめる機会が自己成長力を高めうると述べているように，職業決定に直面して決定を先延ばしたり不安になったりする中で自己を見つめなおし，アイデンティティを形成していく過程に影響を与えることが考えられる。

職業を絞れず模索することに関しては，アイデンティティの形成にはあまり影響を与えておらず，アイデンティティ形成の前段階である可能性がうかがえた。中田（1995）は，学生相談において“決められない”状態にあることが訴えの一部分を構成していた事例の報告から，自分で決定するという行為が発達促進的な課題となっていたと述べている。職業を決定するという行為そのものが，青年期の大学生にとって自己を成長させうる課題であり，アイデンティティの形成に大きく影響するのだろう。職業を模索することは，多くの選択肢から選んで決定することができないというアイデンティティ拡散型の特徴に近いといえるかもしれない。このような場合，職業を選び決定できるよう援助することが，自己の成長へとつながっていくと思われる。

③アイデンティティの形成が職業未決定に及ぼす影響

について検討した結果からは，自己意識の不明確さのみが職業未決定に影響を与えている可能性が示唆された。自己が過去から時間的に連続しているという感覚や，他者や社会などとの関係から自己をとらえる社会的側面からの影響についてはみられなかった。近年の大学生は，現在に焦点を当てた，自己のやりたいことを中心とする職業決定がなされる傾向があるのかもしれない。大学卒者の早期離職が目立っているとの指摘（榎本，1998）からも，その場しのぎの決定とならないように，長期的な展望を持った職業決定を支援していくことも今後必要と思われる。

(2) 教職課程選択の有無による職業未決定およびアイデンティティの違い

①職業未決定に関する質問紙とMEISの各下位尺度得点について，教職課程選択者と教職課程非選択者とを比較した結果から，既に教職という一つの職業への道を考えている教職課程選択者のほうが，全般的に自己意識が明確であり，教職課程非選択者のほうが，職業決定に対してモラトリアム状態にあり，不安が大きいことがうかがえた。

②さらに，教職課程選択の有無両群をアイデンティティの得点によって3群に分けて検討した結果から，両群ともにアイデンティティが未形成であるほどモラトリアム傾向であることが示唆された。アイデンティティタイプ中群では，教職課程選択・非選択者両群間の単純主効果が有意であったことと Fig.1から，教職課程選択者群と教職課程非選択者群とでは異なる類型が考えられる。

一見ある程度職業の方向性を考えていると思われる教職課程選択の学生は，アイデンティティの形成度が高くモラトリアム傾向の低い者が多いが，教職課程を選択していない学生は，アイデンティティ形成度が低くモラトリアム傾向の高い者が多いようである。しかしながら，教職課程を選択している学生の中にも，アイデンティティ形成度が低くモラトリアム傾向の高い者も教職課程非選択者群と同様に存在する。同じく，教職課程を選択していない学生の中にも，アイデンティティの形成度が高くモラトリアム傾向の低い者がいる。この両群は中間者層では差がみられるが，その両端にはあまり差がないことがうかがえる。教職課程を一応選択していることと，教職を希望することとは異なる。教職課程を選択している学生の中には，教職が選択肢の一つとなって職業決定の困難さを軽減していない学生もいるのだろう。杉原（1998）は，表面的には適応的な早期完了型の学生も，きめ細かく調べてゆくと不安や混乱を抱えている兆候が認められる場合があることを示唆している。このように，詳細に検討することで，一見職業決定に近いと思われる学生にも職業決定に困難を抱えている者の存在が推定される。

(3) 今後の課題

本研究において，十分に言及できなかった点は職業決定の過程についてである。浦上（1996）が，就職活動という自分を見つめる機会が自己成長力を高めうるというように，職業決定が自分をみつめる機会となり，アイデンティティの形成に影響を与えていく過程を明らかにする必要があるだろう。面接などの質的分析や臨床事例などから，就職活動あるいは職業決定の過程がアイデンティティ形成に与える影響について明らかにすることが今後の課題である。

謝　辞

本論文作成にあたりご指導いただきました九州大学大学院人間環境学研究院教授の野島一彦先生，同准教授の高橋靖恵先生に心より感謝いたします。

文　献

安達智子・太田さつき　(2004)．若者層におけるフリーター志向 (1)(2) 日本心理学会第68回大会発表論文集，207-208.

榎本和夫　(1998)．大学等における就職・進学等への指導・援助　進路指導，**7**, 27-32.

Erikson, E.H. (1959). *Identity and the Life Cycle. Psychological Issue.* International Universities Press. 小此木啓吾訳編　(1973)．自我同一性 — アイデンティティとライフ・サイクル　誠信書房

石谷真一　(1999)．面接継続回数から見た学生相談臨床の特徴　心理臨床学研究，**17**, 261-272.

笠原　嘉　(1976)．今日の青年期精神病理像．青年の精神病理　弘文堂

神村俊一　(2004)．学卒者就業管理にみる変化とフリーター．労務研究，**57**, 2-13.

Marcia, J.E. (1986). Development and validation of ego-idenntity status. *Jounal of Personality and Social Psychology*, **3**, 551-558.

森本文子・野島一彦　(2006)．大学生の職業未決定状態とアイデンティティに関する研究 — 教職課程選択の有無による比較からの検討 —　若年者の就業に向かう自信の構造と効果的支援に関する学際的研究，平成16・17年度科学研究費補助金研究成果報告書（課題番号16653051），85-101.

中田行重　(1995)．学生相談における自己治癒力について　心理臨床学研究，**13**, 87-102.

下山晴彦　(1985)．来談者の職業決定について — 個人面接の観点から —　東京大学学生相談室紀要，**4**, 21-30.

下山晴彦　(1986)．大学生の職業未決定の研究　教育心

理学研究，**34**, 20-30.
杉原保史　(1988)．自我同一性地位における早期完了型について　心理臨床学研究，**5**, 33-42.
杉原保史　(2001)．過剰適応的な青年におけるアイデンティティ発達過程への理解と援助について　心理臨床学研究，**19**, 266-277.
杉村和美　(2001)．関係性の観点から見た女子青年のアイデンティティ探求：2年間の変化とその要因　発達心理学研究，**12**, 87-98.
高村和代　(1997)．課題探求におけるアイデンティティの変容プロセスについて　教育心理学研究，**45**, 243-253.
谷　冬彦　(2001)．青年期における同一性の感覚の構造 ― 多次元自我同一性尺度（MEIS）の作成 ―　教育心理学研究，**49**, 265-273.
浦上昌則　(1996)．就職活動を通しての自己成長 ― 女子短大生の場合 ―　教育心理学研究，**44**, 400-409.
若松養亮　(2001)．大学生の進路未決定者が抱える困難さについて ― 教員養成学部の学生を対象に ―　教育心理学研究，**49**, 209-218.
若松養亮　(2004)．若者の逸脱的な進路選択を読み解く　発達，**98**，ミネルヴァ書房，80-82.
山下利之・河野康成・葛原茂一郎　(2003)．大学生の職業未決定をもたらす心理的要因の組み合わせに関する質的比較分析　日本教育工学雑誌，**27**, 85-88.